



日本産タマムシ科概説 (17)

黒沢良彦

42. Genus *Trachys* FABRICIUS, 1801 チビタマムシ属

ヨーロッパ産の *Trachys minuta* LINNÉ, 1758 (ヤナギチビタマムシの原亜種)を模式種としている。全世界に約 600 種を産するが、その大部分はアフリカと、インドとインドシナ半島を中心とする東洋熱帯に産し、旧北区にはヨーロッパから中央アジア、北アフリカなどにかけての地域に約40種、日本、中国などの極東地域にやはり約40種を産するが、新大陸では中米と南米からわずかな種類が記載されているだけで、これらの種類も恐らくは別属の *Neotrachys* OBENBERGER, 1923 かその近似の属に移さなければならないであろう。熱帯アジアではインドから、ボルネオ、スマトラを中心としたスダラント、フィリピンなどには極めて多くの種類を産するが、小スンダ諸島、セレベスなどワレス線の外側の地域には極端に種類が少なく、ニューギニアやオーストラリアには1種も発見されていない。この点、前述のヒラタチビタマムシ属 *Habroloma* がニューギニアやオーストラリアにも分布しているのとは極めて対照的である。恐らくはチビタマムシ属 *Trachys* はヒラタチビタマムシ属 *Habroloma* よりは新しい起源のものであろう。旧北区の種類は、前述の通り、中央アジアから西の地域と極東地域の2地域だけに集中し、その中間のトルキスタンからモンゴルを経て満洲の中西部に至る地域にはほとんど見られない。また、ヨーロッパのものと極東のものは、ヤナギチビタマムシやクロチビタマムシなどを除けば、ほとんどの種類は全く系統の異なる種類が大部分を占めている。また、極東地域で

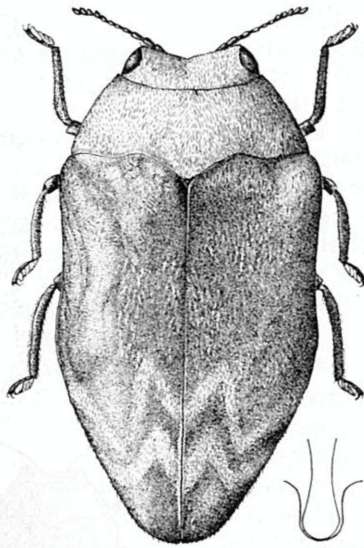
は、琉球列島に種類数が極端に少なく、海流によって分布を拡げたと考えられるオオダンダラチビタマムシ *T. dilaticeps* GEBHARDT ただ1種を産するだけである点に注目する必要がある。恐らく、チビタマムシ属はアフリカ大陸に起源を持つもので、直接北に侵入したものがヨーロッパを中心とした地域の種類で、インドを経て、中国中南部に侵入し、最近の地質時代になって日本にも侵入して来たものが極東地域の種類であろう。琉球列島は元来本属の分布範囲外であったと推定されることも、この考えの根拠である。

日本には22種を産するが、この数は、フランスの8種を筆頭にしたヨーロッパ各国の種数に較べると著しく多く、台湾産の種数をも凌駕し、フィリピン産の種数に匹敵する。しかし、インドシナ半島の57種には遥かに及ばない。このことも、本属が、インドをかなめにして、東南アジアと極東に分布を拡げたものであることを物語っていると思う。

私は1959年に琉球列島を含む日本産の本属をまとめ、20種2亜種を記録したが、その後、その中の1亜種を種として認め、1種を2種に分割した方がよいと考える様になったので、22種1亜種とした

方がよいであろう。また、ヨーロッパの博物館にある模式標本を調べた結果、原記載だけに頼った私の同定には多くの誤があることに気付いた。今回はその結果に基づいて、種名を大幅に変更したので、従来図鑑の中で示した学名とはかなり異っているが、この点ご諒承願いたい。

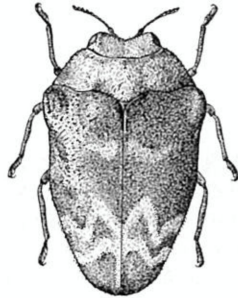
全部の種類が潜葉性で、初夏の頃に新葉の葉肉を袋状に食害し、その中で蛹化して7月下旬から8月



第20図 シナノキチビタマムシ
Trachys auriflua SOLSKY
(黒沢, 1959)

にかけての頃に羽化して来る。新成虫は一時食草の葉上に見られるが、すぐ休眠に入り、習春の新葉の候に再び現れる。越冬場所は、樹皮下がよく知られているが、朽木中、落葉下、こけの下などにも潜りこむ。しかし、越冬場所の記録のある種類はごくわずかである。

1. *T. auricollis* E. SAUNDERS, 1873 クズノチビタマムシ 分布：日本（本州，佐渡，四国，九州，対馬，屋久島，種子島），中国，台湾，インドシナ半島，ビルマ，インド（北東部）。体長 3.5 mm 内外，頭胸部は唐金色，金色の毛で覆われるが，稀に毛が白化するものがある。（ab. *osawai* Y. KUROSAWA, 1959）。



第21図 クズノチビタマムシ
Trachys auricollis E. SAUNDERS

翅鞘は黒色で銀白毛からなる斑紋があるが，黒色部には目立たない黒い毛がある。関東地方から西の地方では普通に見られる種類であるが，東北地方中部では少なく，私の知る限りではその北限は裏日本では山形県庄内地方，表日本では岩手県宮古地方である。台湾のもののは北部のものは日本産のものとはそれ程変りないが，南部のものは翅鞘の色が紫銅色を帯びて来る。もし，これを亜種として認めるならば，*sauteri* KERREMANS, 1912 が亜種名として用いられる。なお，本種の和名はキンイロチビタマムシとなっていたが，金色とは縁遠い色彩をしているので，北隆館の日本昆虫図鑑1950年版では加害植物のクズを加えたクズノチビタマムシとした。ノを加えたのはクズを異った意味に解釈しないための配慮である。

2. *T. auriflua* SOLSKY, 1876 シナノキチビタマムシ 分布：日本（本州），朝鮮，満洲，シベリア東部。体長 4.1~5.2mm，日本最大の種類で，頭胸部は真鍮色，翅鞘は銅色，後方に行く程紫色が強くなるが翅端はまた銅色，毛斑は銀白で強く波曲し，基部と翅端部に淡黄色毛を散布する。加害植物はオオバボダイジュ *Tilia maximowicziana* であるが，稀にシナノキ *Tilia japonica* につくこともある。稀な種類で，分布範囲も狭く，数本の木に限られることが多い。山形県，福島県会津地方，新潟県，福井県など裏日本に限られる。1959年に私は本種を新種と考え，*T. tiliae* n. sp. としたが，その当時から危懼していた通り，沿海州から記載された *T. auriflua* SOLSKY, 1876 が本種に当たることを1973年に確めた。J. OBENBERGER のコレクションの中には満洲の *Erzendjanzsy* 産の1頭と，北朝鮮清津産の3頭の本種と東シベリア産の *T. semenovi* OBENBERGER, 1929 キタドウイロチビタマムシ1頭

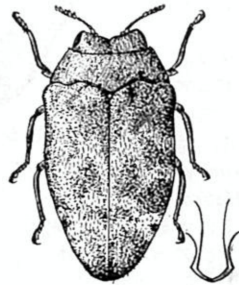
が混っていた。アムールから記載された *Brachys orichalcea* KIESENWETTER, 1879 は本種のシノニムであるが，A. THÉRY が1942年に本種のシノニムにした，やはりアムールから記載された *T. amuricola* OBENBERGER は，その模式標本を見たら，本種ではなく，キタドウイロチビタマムシに似た種類であったが，キタドウイロチビタマムシとは斑紋の様子が若干異っていた。或いはこの種類の異常的なものであるかも知れない。

3. *T. cuneifera* Y. KUROSAWA, 1959 クサビチビタマムシ 分布：日本（本州）。体長 3.7mm，クズノチビタマムシ *T. auricollis* とソーンダースチビタマムシ *T. saundersi* の中間のような形をしていて，色彩，斑紋などはソーンダースチビタマムシによく似ているが，形は肩部が張り出し，後方に強く狭まる点ではクズノチビタマムシに似ている。前胸腹板突起の形は前種に似ている。福島県会津若松市小田山で私自身が採集した1頭に基いて記載したものであるが，*auricollis* と *saundersi* 両種の1代雑種である可能性が高い。採集地の付近には両種共生息していたし，その後本種の採れたことを聞かない。



第22図 クサビチビタマムシ
Trachys cuneifera Y. KUROSAWA (黒沢, 1959)

4. *T. cupricolor* E. SAUNDERS, 1873 ドウイロチビタマムシ 分布：日本（本州，四国，九州）。体長 4.0 mm 内外，頭胸部は真鍮色，翅鞘は美しい銅色，雄は多少紫色を帯びる。翅鞘の銀白色毛斑は翅端部の2本が波曲が弱く両者はほぼ平行し相接近する点で，シナノキチビタマムシと一見して区別できるが，毛斑が剥脱すると区別は困難になる。原記載には産地が明記されてない。G. LEWIS の第1回の採集品であるから，神戸付近か，長崎付近のどちらかであるが，九州では本種は極めて少なく，しかも中



第23図 ドウイロチビタマムシ
Trachys cupricolor E. SAUNDERS (黒沢, 1950)

北部の山地に限られている様であるから，恐らくは神戸付近であろう。大英博物館にある模式標本は♀で，Japan というラベルと LEWIS の標本が大英博物館に入った時を示す G. Lewis 1910—320 というラベルが付いているだけである。加害植物はケヤキで，関東以西の主として山地に発見されるが少ない。私の検した標本の北限の産地は東京都奥多摩町日原であるが，高尾山や御嶽あた

りでも発見できる。しかし、北関東の山地になると、もう以前は同種と考えていたが、紫色が強く、やや黒味がかって見える別種、キタドウイロチビタマムシ *T. semenovi* OBENBERGER になってしまう。国内では、南限の産地は九州中部の山岳地方と考えられるが、国外では、台湾南投県南山溪産の1頭を検した。しかし、大陸の標本は全部 *semenovi* ばかりで本種を検したことがない。三輪勇四郎、中条道夫両博士は「日本産鞘翅目分類目録」の中で台湾から記載された *T. sauteri* KERREMANS, 1912を本種 *cupricolor* (目録の中では *cupricollis* と誤ってつづっている) のシノニムにしているが、これは誤である。

5. *T. dilaticeps* GEBHARDT, 1928 オオダンダラチビタマムシ 分布：日本(佐多岬, 屋久島, 種子島), 琉球(奄美諸島, 沖縄諸島, 八重山諸島), 台湾, 中国。体長 3.3~4.8 mm, ダンダラチビタマムシ *T. variolaris* E. SAUNDERS に似ているが、大形で、翅鞘の毛斑が単調でサンゲチビタマムシ *T. robusta* E. SAUNDERS の毛斑に似ているが、より濃色である点で区別でき、サンゲチビタマムシからは翅鞘の地色が黒味を帯び、時に紫色や淡い唐金色を帯びることがあるが、サンゲチビタマムシの様に唐金色や真鍮色のことはなく、前胸背の側縁が後縁角の前方で曲り、直線的でない点で区別される。要するに、ダンダラチビタマムシとサンゲチビタマムシの中間に位置する種類で、この3種は疑いなく一つの種群を形成するものである。私は1959年に屋久島産の標本に基き、タンダラチビタマムシの1亜種 *T. robusta robustissima* として記載したが、その後、北は九州南端の佐多岬から琉球列島の全域を経て台湾に至る地域に広く分布していることを確めた。更に中国大陸の中南部にも産することを確め、恐らくは中国から記載されたどれかの種類に当るのではないかと考えていた。1973年渡欧の際にこの点に注意していたが、GEBHARDT によって中国の浙江省杭州から記載された *T. dilaticeps* が本種に当ることを確めた。また、北ベトナム(トンキン)の Faï-Tsi-Long から記載された *T. mixtipilis* OBENBERGER, 1929 も間違いなく本種と同一種である。加害植物はシイ類であるので、本種の幼虫を含んだ生葉のついた枝が海流によって運ばれることも考えられる。琉球列島は本来本属の種類の分布圏外であったのに、本種が海流によって他より運ばれて来て侵入したものであろう。草本や落葉樹の葉に潜入する種類では、漂流中に海水の侵入を受け易くとも本種のような分布形式をとることは不可能である。

6. *T. griseofasciata* E. SAUNDERS, 1873 ナミガタチビタマムシ 分布：日本(本州, 四国, 九州)。体長 3.4~4.1 mm, 地色はチョコレート褐色で銅色を帯びる。翅鞘は一面に褐色毛で覆われ、その中に銀白毛からなる帯状紋がある。原産地については、原記載には Japan とある以外に詳しい記述

がなく、大英博物館の模式標本にもそれより詳しい産地を示すラベルがないが、G. LEWIS の第1回の採集品であるから長崎付近か神戸付近であると考えられる。しかし、私の知見では、前者は本種のみを産し、後者は主として酷似種のヤノナミガタチビタマムシ *T. yanoi* Y. KUROSAWA の分布圏であるが、本種も混在する。従って、後産のものに基づいて記載された場合には1959年に私が分離した本種と *yanoi* とは関係が逆転し、本種には別の種名を考えなければならなくなる。そこで、大英博物館にある模式標本が問題になって来るが、問題の模式標本は Syntype と指定された2頭で、共に間違いなく本種で、*yanoi* ではなかった。模式標本の産地は、ラベルには Japan とだけあるものの、恐らくは長崎だろう。

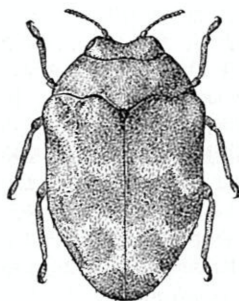
以上の通り、本種は極東地域では最も古く記載されたチビタマムシ類の1種で、中国大陸やインドシナ地域の種類でもこれより古く記載された種類はなく、その学名については問題が起る筈は全くなかったのであるが、SAUNDERS に次いで古く日本のタマムシ類を記載した G. LEWIS が、彼の記載の後に付けた日本のタマムシの目録の中で、本種を *T. subbicornis* MOTSCHULSKY, 1860 のシノニムにしまったので、両者に基いた後の学者の学名の取扱いに著しい混乱を生じさせてしまった。MOTSCHULSKY により記載された *subbicornis* は、前号の *Habroloma* の項で触れた通り、*Trachys* 属の種類ではなく *Habroloma* 属の種類で、本種にその名を当てるのは誤である。しかし、LEWIS の扱いはその後、OBENBERGER に引き継がれ、彼が1918年に旧北区の *Trachys* 属をまとめた時も、1937年に Junk の甲虫目録のチビタマムシ類を出版した時にも *griseofasciata* は *subbicornis* のシノニムになっている。一方、日本では、故松村松年博士は、後に述べる *yanoi* を含む本種を *griseofasciata* とした。これは SAUNDERS の原記載に従い、LEWIS の後の目録を見落したためと思われる。一方、故湯浅啓温博士はやはり *yanoi* を含めた本種に *subbicornis* を当てた。これは、LEWIS の目録と、OBENBERGER の1918年の扱いに従ったものと思われる。ここまでは、本種と *yanoi* を含む当時の「ナミガタチビタマムシ」は1種と見做されていたので、単なる学名の相異だけで、それ程混乱もなかったが、1936年に三輪勇四郎、中条道夫両博士が刊行された「日本産鞘翅目分類目録」の中で、両種をそれぞれ別種として取扱い、*griseofasciata* (*griseifasciata* と誤植されている) は北海道、本州、四国に分布し、*subbicornis* は北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国、台湾、シベリアに分布するとしたために、両者は別な種類で、分布まで異なることになってしまった。従って、外国では異名として扱われている種名が、日本ではそれぞれ別な種類として存在するというおかしなことになってしまった。これは、松村、湯浅両方に気兼ねした全くの政治的な扱いであって、後述

する *griseofasciata* と *yanoi* の混同には全く無関係である。

1952年に矢野俊郎氏はいわゆる *griseofasciata* ナミガタチビタマムシと称されている種類の幼虫を調べ、その形態にはっきりした2型のあることを確めた。この報告に基づき私はいわゆる「ナミガタチビタマムシ」を再検討した結果、成虫の形態にも、体表がチョコレート色をし銅色光沢があり、頭楯が幅広く、長さの約2倍あるものと、体表が明るく、唐金色を帯び、頭楯の幅が狭く、長さの約1.5倍のもの2型があることを確めた。LEWISの採集地やSAUNDERSの原記載などから、私は前者を*griseofasciata*と考えたが、後者は、その原記載から*subbicornis*とは全く別物と考えたので、大陸から記載された他の種類の中に当たるものはないかと探したが、当たるものがなく、仕方なく、新種として記載し、*yanoi*とした。

本種の加害植物は主としてムクノキで時にエノキにもつくが、*yanoi*の様にケヤキにつくことはない。九州には普通であるが、表日本では関東地方の沿海地方が北限で、裏日本では新潟県が北限である。海外産の標本は見たことがないが、北ベトナムから記載された*T. subbicornoides* OBENBERGER, 1918がどうやら本種に当たる様な気がする。朝鮮や中国の標本は若干見ているが、すべて*yanoi*の方であった。OBENBERGERのコレクション中にあった上海の標本も全部*yanoi*であった。彼はこの標本を*subbicornis*の思い、真の*griseofasciata*に*subbicornoides*という新名を与えたものと思われるが、彼が当時*griseofasciata* (= *subbicornoides*) と *yanoi* (= *subbicornis*) を区別していたとすればその種の選別眼に敬服せざるを得ない。*subbicornoides*の模式標本はOBENBERGERのコレクション中には見当らなかったが、どうやらパリの国立自然科学博物館にあってらしい。この事を知った時には既にパリからブラザーに廻ってしまった後で、後の祭であった。

7. *T. inconspicua* E. SAUNDERS, 1873 ウメチビタマムシ 分布：日本(本州、四国、九州、対馬)、朝鮮、中国。体長2.5mm内外、地色は暗い銅黒色、唐金色を帯びるものもある。翅鞘の毛斑は銀白色、後方の2帯だけややはっきりしている。加害植物はウメとアンズ、時にスモモにつくこともある。西日本に多い種類で、私の知る分布北限は福島市。模式標本の産地はJapanとあるだけで、どこか判らない。しかし、やはりLEWISの第1回の採集品であるから長崎付近か神戸付近のどちらかであろう。*T. ogumensis* OBENBERGER, 1924 オグマチビタマムシは本種のシノニムである。その産地はOguma, Kiushuとなっているが、Ogumaは地名ではなく、故小熊樺博士のことで、同博士の九州の採集品である。また、朝鮮のソールから記載された*T. galloisi* OBENBERGER, 1940も本種と同一種である。中国からの記録は私の1959年の記録以外にない。私は湖南省新化県産の1頭(白畑孝太郎氏採集)を検した。



第24図 ウメチビタマムシ

Trachys conspicua E.

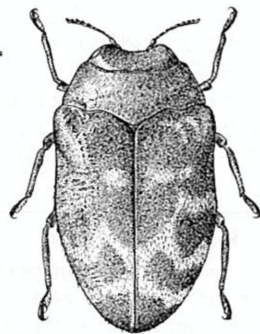
SAUNDERS (北隆館, 日本昆虫図鑑, 1950)

本種 *inconspicua* とは異なる種類であったが、後者にあるものは *Trachys* 属ではなく、*Habroloma* 属のものであった。従って、どちらが真の type であっても、私の1959年の扱いは誤であるが、私の考えでは、大英博物館にあるものが真の *dauidis* の模式標本で、パリ国立自然科学博物館のものは、同時に記載された *T. marginicollis* FAIRMAIRE, 1888 の模式標本と同一種と考えられるので、何らかの誤で *marginicollis* の模式標本の一部に誤ったラベルが付けられたものと考えてよいだろう。

8. *T. inedita* E. SAUNDERS, 1873 マルガタチビタマムシ 分布：日本(本州、四国、九州)。体長3.0mm内外、体型は短太、楕円形で、肩部の突出は弱い。地色は暗い唐金色、翅鞘は金褐色と銀白色からなる複雑な毛斑で一面覆われる。加害植物はムクではないかと考えられているが、はっきり定められたわけではない。冬期ケヤキやムクの樹皮下でよく越冬している。西南日本に多い種類であるが、本州中部では少なく、私の知る限り北限の産地は東京である。国外の分布は、中国、台湾、ベトナム、フィリピンなどに酷似種が広く分布していて、これらを比較してみないとはっきりした分布を知ることが出来ない。しかし、目下の所資料不足でそれが出来ないでいる。原産地は例によってJapanだけで、どこも判らないが、本種は長崎に普通に見られるので、LEWISの第1回の採集品である限り、長崎に間違いないと考えている。私は1959年にウツギにつく別の種類が *inedita* SAUNDERS, 1873 に当るものと考え、本種に新名 *oviformis* を与え新種として記載した。しかも、御丁寧にも、模式標本の産地を長崎としたが、大英博物館の模式標本は *syntype* と指定されたJapan産の3頭の本種であった。この誤りは、従来アカガネチビタマムシと称された種類のイメージが私の頭の中に大きな圧力となっていたからに他ならない。私が *inedita* とした種類は *tsushimae* OBENBERGER, 1922 としなければならぬ。従って私が *tsushimae* とした種類も別な名が必要になって来るが、これらは順次それらの種の項で説明することにする。しかし、和名は学名に従っ

て移したり、新名を用意したりするとひどい混乱を招くのは必至であるので、なるべく従来の名を残すことにした。この点で私は中根猛彦博士の意見（昆虫と自然、1976、11、(4)、p. 3）に賛成で、ずっとこの意見を通して来たつもりである。無暗に新名を創りたがったり、己の命名した種名にいつまでもこだわったり、よく理解もしないで、規約をたてに新名を付けたりする態度は、分類学を毒しこそすれ、それを発展させるには常に負の力として働くことを心に銘記すべきであろう。自然は常に一つであり、命名されるためにあるものではない。ましてや、己の命名した新名が、他人によって消されるのは、意見の相異であるから仕方ないことであって、その報復を考えるなどは言語同断である。

9. *T. minuta* (LINNÉ, 1758) ヤナギチビタマムシ
 分布：日本(北海道、本州、佐渡、四国、九州)、朝鮮、満洲、中国、シベリア、ヨーロッパ。体長 3.0 ~ 3.8 mm、頭胸部は紫銅色、時に黒味がかかったり、紫色になったりする。翅鞘は黒色、多少紫または青色を帯びるが、時に美しい青藍色になることがある。基本型は全体が暗銅紫色のものであるが、変化が多い。5 異常型が命名されているが、個体変化が多い本種のいろいろな体色にそれぞれ命名していたら限りがないのでここでは全部省略する。加害植物はヤナギ類であるが、ヨーロッパでは他にハンパミ属、ニレ属、ナナカマド属などの植物につく記録がある。ただし、これらの記録はいずれも怪しいもので、やはりヤナギ類がその主なものであろう。私の東北地方での経験ではヤナギ類の中でも、シダレヤナギやコリヤナギ、タチヤナギなど細葉の種類は余り好まず、キツネヤナギやパッコヤナギのような広葉の種類に多くついていて、西日本では少なく、アカメヤナギに多くつく。満洲から記載された *T. mandjurica* OBENBERGER, 1917 の模式標本は本種の小型で白帯の明瞭なものであった。また OBENBERGER のコレクション中には *T. minuta jureceki* という名が朝鮮元山産の標本に付けられていたが、この名はどこに何時記載されたのか私ははっきりさせることが出来なかった。これは *minuta* の中に含めて区別する必要はないであろう。日本産のものは、大陸産のものに較べて、翅鞘の点刻が弱く粗で、一見光沢が強い感じがするので、亜種として区別してよいであろう。この場合 G. LEWIS が箱根宮の下から記載した *Brachys salicis* LEWIS, 1892 が、亜種名として用いられる。大英博物館にある *salicis*



第25図 ヤナギチビタマムシ
Trachys minuta salicis
 LEWIS (北隆館、日本昆虫
 図鑑、1950)

の模式標本は2頭あり、共に同じラベルがつけられている。このうち左側のものは正しく記載通りのものであるが、右側のものは私が *inedita* としたアカガネチビタマムシ *T. tsushimae* OBENBERGER, 1922 であった。従って、将来混米を招かないために左側のものを早急に lectotype に指定する必要があるであろう。なお、本種は *Trachys* 属の模式標本であるが、LEWIS がなぜ *salicis* を北米や南米に分布する *Brachys* 属にしたか理解に苦しむ。*Brachys* 属は新大陸に多くの種類がある属で、一見チビタマムシ属に似た形をした種類が多いが、中胸腹板に明瞭な触角溝がある点ではっきり異なるグループに属するもので、このグループは主として新大陸に分布する。(国立科学博物館)

Serica sawadai (NOMURA, 1959) について

沢田 玄正

本種名は桐朋学報、No. 9, p. 43, 1959 に *Ophthalmoserica sawadai* として NOMURA が与えたものである。そしてその synonymy にもあるように、これは *Serica boops*, var. *takagii* SAWADA, Nippon-no-Kôchu, 1, 1, p. 18, 1937 に対して与えられたものであることは明瞭である。

現行の国際動物命名規約 Article 45 (e) (i) は頭初(1961)のものでは疑問が残るので、1972 年に後半が付け加えられて次の如く改訂されている。

Before 1961, the use of either of the terms "variety" or "form" is not to be interpreted as an express statement of either subspecific or infrasubspecific rank, and their use is therefore to be interpreted as denoting subspecific rank.

従って上記の *Serica boops*, var. *takagii* Sawada, 1937 は *Serica boops takagii* Sawada, 1937 と解釈されるべきであり、且つ Article 17(9) によってその名は available である。一方 "*takagii*" を種の rank と見るか亜種の rank と見るかは分類学的なことで、命名法上の "*takagii*" は species group name として available であるから、もしこれを種として認める場合は次の如く取扱われるべきと思う。

Serica takagii SAWADA

Serica boops, var. *takagii* SAWADA, 1937

Ophthalmoserica sawadai NOMURA, 1959

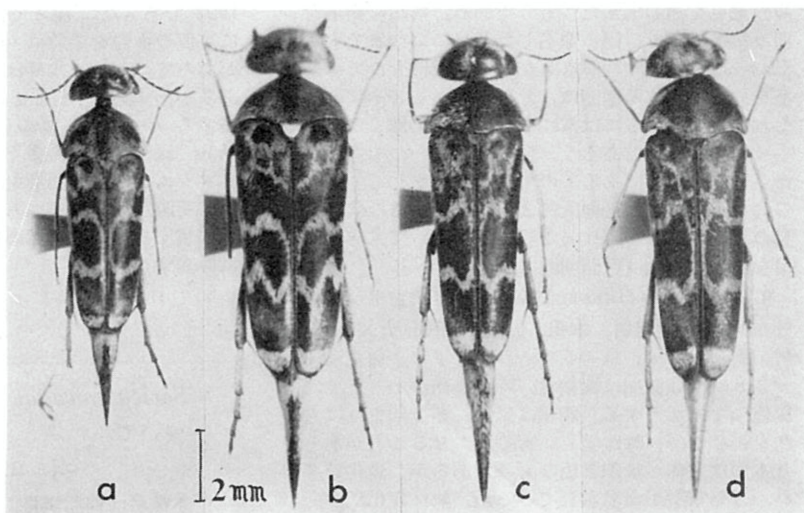
Serica sawadai : NOMURA, 1972

(東京農業大学)

熊毛諸島のハナノミについて

高 桑 正 敏

1975年7月、九州大学農学部の榎原寛氏は屋久島から北西へ約70kmに位置する黒島を調査されたが、筆者は黒沢良彦博士を通じてその時のハナノミ科標本を譲り受けることができた。従来、黒島においてはハナノミ科の記録はまったく知られていなかったことに加え、きわめて興味深い種類が含まれていたのここを報告しておきたい。これに先立ち、常日頃から筆者に御教示下さっている黒沢良彦博士と野村鎮氏ならびに榎原寛氏、および屋久島産の貴重な標本を恵与された上坂幹夫・秋山秀雄両氏に誌上を借りて厚く感謝申しあげたい。



a. *Glipa azumai* ♂ (黒島産) b. *Glipa malaccana nipponica* ♀ (黒島産)
c. *Glipa* sp. ♂ (黒島産) d. *Glipa* sp. ♀ (屋久島産)

1. クライロヒゲハナノミ *Hihehananomia palpalis* KŌNO

1 ♂, 黒島, 23. vii. 1975, 榎原寛採集。

2. サタオビハナノミ *Glipa azumai* NAKANE

1 ♂, 黒島, 25. vii. 1975, 榎原寛採集。

本種は九州佐多岬で1949年に得られた1頭(♂)を基に記載され、その後はつい最近の筆者の八重山諸島西表島からの報告があるのみであった(ELYTRA, 3, p. 16, pl. 3, fig. 1, 1976)。西表島産の個体は、佐多岬のものとは上翅中央の環状紋の形が一見して異なるために別亜種とするのが妥当であるが、今回の黒島産の個体は斑紋については佐多岬のものと差がなかった。

3. コウトウオビハナノミ *Glipa malaccana nipponica* NOMURA

1 ♀, 黒島, 24. vii. 1975, 榎原寛採集。

4. *Glipa* sp.

1 ♂, 黒島, 25. vii. 1975, 榎原寛採集。

この日本未記録種は屋久島にも産する。屋久島産のものも未発表だったのでここに併せ発表する。

1 ♂, 屋久島梶川(たぶがわ), 11. vii. 1961, K. UEDA 採集(野村鎮氏蔵); 1 ♂, 屋久島宮之浦, 30. vii. 1975, 上坂幹夫採集; 1 ♀, 屋久島宮之浦, 23. vii. 1975, 秋山秀雄採集。

本種は上翅の紋様は前種とほとんど区別できないほど似るが、デニタリア *Paramere* が太短く先端が黒化することで、また次によっても容易に分けることができる。

a. 体は細長い; ♂の前脛節は内方へ強く弯曲する; 複眼に長毛を密生する; 尾節板は長く先端は尖らない; 触角節は $3 < 4$, $5 > 6$; 前胸背の中央黒紋はほとんど認められない; 小楯板の微毛は黄ないし黄褐色…………… *Glipa* sp.

b. 体は太い; ♂の前脛節は直線状; 複眼に短毛を粗生する; 尾節板はより短く先端は鋭く尖る; 触角節は $3 \geq 4$, $5 \leq 6$; 前胸背の中央黒紋は明瞭; 小楯板の微毛は白色…………… *G. malaccana nipponica*
なお、*G. malaccana ishihakiana* KŌNO は上翅の紋がほとんどすべて白色なこと、複眼にまったく毛がないことで上記のもの2つと容易に区別でき、サタオビハナノミの西表島産も斑紋や形態がきわめて似るが、肩部の斑紋群から下斜め方向へ会合線部まで延びる白帯が欠けていることで上記のもの3つと区別できる。

これら4つのものは日本産 *Glipa* 属の中でも特異な一群を構成しており、できるだけ近いうちに、互いの種関係を中心に検討してみるつもりである。
(横浜市金沢区)

~~~~~  
飯島のクロカナブン

クロカナブン *Rhomborrhina polita* WATERHOUSE の分布は本州、四国、九州の本島だけに限られ、その付属島のどこからも記録がない。今回九州大学農学部の榎原 寛氏の採集品中に鹿児島県飯島産の本種を見出したので記録しておく。

1 ♂, 鹿児島県薩摩郡下飯村手打, 5. viii. 1975, 榎原 寛採集。(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○男女群島のハネカクシ (ハネカクシ科分布資料 5)

筆者は最近、吉田喜美明氏から同氏が男女群島から採集した甲虫類の1部を恵与されたが、それらの中には同群島から未記録のハネカクシの1種が含まれていた。そこでここに記録し標本を恵与された吉田喜美明氏の御厚意に報いたい。なお、現在まで男女群島からは男島と女島からそれぞれ *Paederus fuscipes* CURTIS アオバアリガタハネカクシ唯1種が知られているに過ぎなかった。

*Philonthus (Philonthus) rectangulus* SHARP  
カクコガンシラハネカクシ

1頭, 男島, 5. viii. 1972, 吉田喜美明採集。  
(東京農大, 渡辺泰明)

○ハッタアメイロカミキリの新産地

*Obrium hattai* K. & N. OHBAYASHI ハッタアメイロカミキリの石垣島以外の記録を筆者は知らない。筆者は西表島と与那国島でも得ているので、既に記録があるかもしれないが報告しておく。

4頭, 西表島白浜, 9. vi. 1972, 入江平吉採集;  
1頭, 与那国島宇良部山, 15. v. 1974, 入江平吉採集。

西表島ではアカマガシワの花をすくって得た。与那国島では枯枝をたたいて得たが、何の枯枝だったか記憶していない。(福岡県宇美町, 入江平吉)

○トカラ列島中之島のオビハナノミ属について

1. コウトウオビハナノミ *Glipea malaccana nipponica* NOMURA

1♂2♀♀, 中之島, 30. vi. 1973, 入江平吉採集;  
6♂8♀♀, 中之島, 12—15. vii. 1974, 清野隆採集。

本亜種の従来の分布は、伊豆三宅島、御蔵島、屋久島、奄美大島、沖縄本島が知られていた。

2. ザウテルオビハナノミ *Glipea sauteri* PIC

14♂♂, 中之島, 12—15. vii. 1974, 清野隆採集;  
1♂中之島, 20. vii. 1975, 小坂隆採集。

本種の従来の分布は、屋久島、奄美大島、石垣島、台湾が知られ、トカラ列島は前種とともに今回が新記録。他産地産個体と比較して特に形態差は見つかからない。

3. トカラオビハナノミ *Glipea masatakai* CHŪJŌ  
タイプの1♂(中之島, 11. vii. 1960, 佐藤正孝採集)のみが知られる。

本種は前種およびアヤオビハナノミ *G. ohgushii* CHŪJŌ のグループに入るようで、かつて野村鎮氏(1963)は本種を前種の亜種として扱ったことがある(その後同氏(1966)は独立種としている)ほどだが、今回前種が15頭採集されてしかも他産地の個体と特に差がなかったことから、少なくとも *masatakai* は前種 *sauteri* とは亜種関係ではないことが明らかとなった。本種を原記載から判断すれば、トカラ産の前種とは次の2点で大きく異なる。

a. 上翅基本の白紋と中央後方の白帯とは会合線に沿ってつながる (*sauteri* はつながらない。しか

し石垣島産の個体にはつながる傾向のものもある)。

b. 触角第1節は2節より少し長く、5節は4節より明らかに長い (*sauteri* は触角第1節は2節より明らかに長く、約1.5~1.7倍、5節は4節よりわずかに長く、約1.1~1.3倍)。

本属のだいたいの種は採集される環境に差はないのにもかかわらず、前種が今回15頭採集されたのに本種が1頭も採集されなかったのは奇妙にすら取れるが、将来の採集に期待したいと思う。

末筆ながら、日頃から快く資料を提供下さる入江平吉・清野隆・小坂隆の諸氏に深く感謝申しあげる。  
(横浜市金沢区, 高桑正敏)

○上飯島から未記録の甲虫類(2)

現在まで上飯島から知られているコガネムシ類は、田中洋海 (LEBEN, 1973, (11): 45—46.) によって記録された7種のみで、後にこの記録は田中洋 (飯島自然公園候補地学術調査報告書: 1974, 43—45.) が引用している。

筆者は昨年同島を訪れたが、その際採集出来たコガネムシは6種であった。しかしこの中のコアオハナムグリ沖繩亜種を除く5種は同島から未記録であるので、ここに記録しておく。なお、種々御教示戴いた東京農業大学昆虫学研究室の渡辺泰明先生に御礼申しあげる。

1. *Nipponoserica similis* (LEWIS) カバイロビロウドコガネ

5頭, 里, 28. 29. iv. 1975.

2. *Adoretus tenuimaculatus* WATERHOUSE コイチャコガネ

1頭, 里, 29. iv. 1975.

3. *Anomala octiescostata* BURMEISTER ヒラタアオコガネ

12頭, 里, 28. iv. 1975; 3頭, 里—市の浦, 30. iv. 1975.

4. *Cetonia pilifera* MOTSCHULSKY ハナムグリ

10頭, 里, 29. iv. 1975.

5. *Nipponovalgus angusticollis* WATERHOUSE ヒラタハナムグリ

3頭, 里, 28. iv. 1975; 17頭, 里—市の浦, 30. iv. 1975. (松浦園芸高校, 吉田喜美明)

○石垣島でアオヒメコバネカミキリを採集

*Epania maruokai* HAYASHI, 1968 アオヒメコバネカミキリは西表島産1頭にに基づき記載され、その後西表島以外の産地は知られていなかった。しかも、西表島でも得られている個体数は多くなく、2~3頭程度の様である。幸い筆者は、西表島の他に同じ八重山諸島の石垣島でも採集しているので、石垣島を新産地として報告しておく。

1頭, 石垣島於茂登岳, 14. iv. 1973, 入江平吉採集。  
この個体はヤエヤマコンテリギの花をすくって得た。西表島では1973年4月7日にカンピラの滝付近で、ナガバイヌツゲの花をすくって1頭を得ている。なお、同時に西表島では本種とは別のやはり *Epania* 属の種をもう1種得ている。(福岡県宇美町, 入江平吉)

## = &lt; 紹 介 &gt; =

柴田泰利：日本産ハネカクシ科目録 (I)

(昆虫綱：鞘翅目)

(日大三高研究年報 (19) : 71—212, 1976)

ハネカクシ科はゾウムシ科とともに、甲虫類の中では最も大きなグループとして知られている。しかし、日本での研究の進展は遅々としたもので、今後多くの研究者の輩出が望まれているが、適当な入門書や解説書が存在していないことと関連して研究者や同好者は数えるほどの存在でしかない。著者の柴田泰利氏はこのような数少ない研究者の一人で、20年もの長い間、ハネカクシ科の研究に打込んでこれ、優れた業績を残されてきているが上記の目録もその一つである。

本目録には日本に産する Micropeplinae, Piestinae, Proteininae, Omaliinae, Phloeocharinae, Pseudopsinae, Oxytelinae, Leptotyphlinae, Oxyporinae, Megalopsidiinae, Steninae, Euaesthetinae 各亜科に含まれる 247 種が集録されている。しかし本目録はたんなる種名の羅列だけではなく、従来の目録には見られないような趣向がこころされている。

各種の synonymy には、種名にかかわりのある全ての文献が列記されているばかりでなく、同定の便を考慮して monograph が刊行されている場合、あるいは形態的特徴を示している図や写真が掲載されている場合等の文献も別に示されている。分布地についても細かな配慮がなされていて、各種の模式産地が示されているのはもとより、安立綱光 (The staphylinid fauna of Japan; J. Tôyô Univ. (11) : 166—200, 1957), 中根猛彦 (ハネカクシ科; 原色昆虫大図鑑 II (甲虫編), 1963 北隆館) 両氏が挙げている既知産地以外の新たな分布地の出典も併記されている。さらに、マクロな視野から各群の分布型を比較対照することが出来るように属全体の分布域も示されている。

いずれにしても、このような内容を持った目録は十分な文献渉猟が行われるとともに、不断の努力の積重ねがあってこそはじめて成し得ることで、著者の労苦には心から敬意を表するものである。なお、本目録には日本産ハネカクシの約30%が集録されているに過ぎず、続篇の1日も早い刊行が待たれる。

## 昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号 (各号 100本 160円)

なお、無頭針00号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒 150 東京都渋谷区渋谷 1丁目 7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

## 志賀昆虫普及社

そして日本産ハネカクシ全種類の目録が発行されることにより、これが導火線となって多くのハネカクシ研究者が出現することを著者とともに願うものである。(東京農大、渡辺泰明)

## ——甲虫談話会第回採集会のお知らせ——

長らくの懸案であった採集会を、会員渡辺徳氏のお骨折りで、下記の要領で行うことができることになりました。同氏に心から厚くお礼を申し上げたく存じます。

## 記

場所：宮城県蔵王山かもしか温泉 (頂上直下、  
——約 1,100 m)。

日時：7月23(金)～25(日)。

集合日時場所：宮城県刈田郡蔵王町遠刈田温泉バス停留所、7月23日午後3時20分、3時30分に渡辺氏のマイクロバスに乗車出発の予定。

上野駅9時発ひばり3号または9時41分発まつしま1号に乗車白石駅下車、駅前より青根温泉行または遠刈田温泉行バスに乗車、遠刈田温泉駅下車。バスは約1時間間隔ですから上野を早目に出て、遠刈田あたりで採集も可。遅れて来られる方は仙台～山形バスに乗車 (遠刈田でも乗れます)、蔵河原下車、これより徒歩約40分。

費用：遠刈田までの運賃は各自負担、かもしか温泉の宿泊費は2,500円 (一泊3食付)。

なお、かもしか温泉付近は国立公園内ですので、植物採集はご遠慮下さい。温泉は蔵河原から徒歩約40分かかりますが、荷物はリフトで運搬します。途中でも十分採集できます。また、温泉は自家発電ですが、夜間採集の設備は整っています。

ご参加の方は黒沢良彦 (東京都新宿区百人町、3-23-1、国立科学南物館分館) に7月17日までに電話または郵便でご連絡下さい。

## 甲虫談話会

会費 (1カ年) 1000円、次号は9月中旬発行予定、

投稿〆切は8月15日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話 (364) 2311, 振替 東京 60664

## タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥ 4,500, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥ 1,400, 送料一箱につき都内及第一地帯：3箇以下 ¥ 1,200, 4箇以上 ¥ 850 (以下同様), 第2地帯 ¥ 1,400, ¥ 950, 第3地帯 ¥ 1,600, ¥ 1,050. 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥ 140)

## タツミ製作所

〒 113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 811-4547